



Title	中近世日本語の濁音・鼻音をめぐる研究
Author(s)	山田, 昇平
Citation	大阪大学, 2015, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/51857
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名（山 田 昇 平）	
論文題名	中近世日本語の濁音・鼻音をめぐる研究
論文内容の要旨 本研究は、日本語のいわゆる「濁音」の歴史的変遷に関する諸問題を扱ったものである。 先行研究では、古い時代の濁音について、それがアクセントなどに近い超分節音の領域で捉えられるとする想定、また清音と濁音の弁別特徴が、濁音に前接する鼻音（濁音前鼻音）の有無であったとする想定が、それぞれなされた。本研究は、古い時代の濁音が先行研究で指摘されるようなものであったとして、それが何故変化したのか、またその変化が日本語にどのような影響をもたらしたのか、という観点から、特に濁音そのものに関する問題と、濁音に関わる重要な要素である鼻音に関する問題を扱った。 本研究は三部からなる。第Ⅰ部では資料上で濁音・鼻音をあらわすのにもちいられた、歴史的な術語について考察を加えた。これにより、古い時代の濁音・鼻音がどのようなものとして認識されていたかを確認した。第Ⅱ部では、濁音・鼻音に係る資料とされるものについて、検討した。これは、文献資料から濁音・鼻音に関する情報を抽出するにあたっての問題点を、具体的に指摘する目的からなされた。第Ⅲ部では濁音・鼻音に関する言語事象について、考察を加えた。これにより、日本語史上における濁音に関わる問題に対して解決を図った。 各章の要旨は次の通り。 《第Ⅰ部 歴史的術語の検討 ―濁音・鼻音をあらわしたことは―》 【第1章 “sonsonete”】 本章では、中世末期のイエズス会宣教師、J. ロドリゲスの『日本大文典』にみられるポルトガル語 “sonsonete” を対象とした。同語は、『日本大文典』の中で、当時の濁音前鼻音について言及する際にもちいられるが、先行研究ではこの語についての理解が一定していない。このような状況を踏まえて、本章ではこの語に対して、他のキリシタン資料を中心にもちいて、同時代的な解釈を加えた。 その結果、“sonsonete” はアクセントやイントネーションのような音を指すのにもちいられており、従来指摘のあるような「鼻音性」や「皮肉のニュアンス」といった意味はみとめられないことなどを確認した。そして、これらの具体的根拠から、『日本大文典』の “sonsonete” は、単なる「音調」や「抑揚」といった意味でとらえるべきものであることを示した。またこれによって、当時の濁音前鼻音がロドリゲスにとって、アクセントやイントネーションなどと同様の領域の音として認識されていたことを明確にした。 【第2章 「言便」】 本章では、近世後期の国学者、賀茂真淵の『語意考』にもちいられた語である「言便」を対象とした。同語は当該資料で、日本語の連濁について「言便の濁り」などとしてもちいられる。ここでは、特に同語の通時的背景に注目し、さらに従来から関係が指摘される「音便」との関係に留意しつつ検討を行い、次の通りのことを指摘した。 「言便」は中世前期には、広く「発音の調子」を指す語として学術的文脈に使用されたが、この用法は早い段階で廃れた、一方で中世後期には「音便」が言語事象に対する説明概念として多く用いられるようになった。また、同じ時期の「言便」は、「発音が良い、悪い」といった発音の対する評価の文脈で多く用いられるようになる。そして、近世前期には「言便」の主な用法であった「ゴンビンザワヤカ」が「ゴンビザワヤカ」へと変化し、「言便」の口語としての使用が衰退した。これにより、『語意考』にもちいられる「言便」は、既に前代からの用法とつながりをもたない、当時不明の語であったことが明らかになった。 《第Ⅱ部 記述と解釈 ―資料上にあらわれた濁音・鼻音をどのように読み解くか―》 【第3章 『さんげろく』の “~”】 本章ではドミニコ会宣教師 D. コリヤードの『さんげろく』において、濁音前鼻音をあらわすアセント符号 “~” (til, tild) を扱った。この符号は同じ語を表記する場合であっても、その使用にゆれがみられる。従来このゆれは、“~” は当時の実態を反映するはず、という前提のもと処理されてきた。ここでは、このような見方に対し、そもそもの符号	

としての使用法を明らかにすべきという立場から、書記論的なアプローチを加えた。

これにより、本書の“～”について、その使用が義務的でないという点を明らかにし、当該の符号のゆれは書記上の事情によって説明されるべきものであることを指摘した。また、当該の符号を付すべき箇所と、長音をあらわす符号を用いるべき箇所とが衝突した場合、長音符が優先的に使用されることも指摘し、これは濁音前鼻音と長音との特定のしやすさの差によって説明されるものであることを示した。

【第3章 補 『さんげろく』にみえる“～”の分布】

本章では第3章で扱いきれなかった“～”に関する問題の処理を目的とし、特に“～”の分布に関して、① b の前の“～”の使用傾向、② “～”使用と分かち書きの関係、③ “～”が一定して付されない形式の三点について述べた。

①については、b の前に“～”が付されるのは、コリヤードが、濁音化が生じたと判断した場合と考えられること、②については、“～”は音韻語を単位としており、それが分かち書きに反映されること、③については、濁音前であっても“～”が使用されないものは、特定の形式ごとに定まっているようであり、これはコリヤードが独自に定めたものと考えられることを、それぞれ指摘した。また、これらの内、②については当時の言語実態の反映と考えて問題ないが、①③については、コリヤードによる、人為的なものと考えられるとした。

【第4章 『以敬斎聞書』の四つ仮名識別法】

本章では、『以敬斎聞書』の内の箇条「すつしちの仮名つかひの事」に記される、いわゆる「四つ仮名」の識別法に関わる記述を検証した。この記述は、「じ」「ぢ」「ず」「づ」の四つ仮名のうち、「ぢ」「づ」を「つめて少し鼻へかけて濁る」とするものである。先行研究ではこの記述について、「つめて」をこれらの音の閉鎖性、「鼻へかけて」を鼻音性として解釈し、中世末期ごろの「ぢ」「づ」の音価 [ɲdʒi] [ɲdzu] を伝えるものとしていた。

ここではこれに対し疑問を呈し、同時代資料の記述などをもとに、この記述が謡曲などで「ノム」や「フクム」と呼ばれる、[ɲ] の音を示すとする解釈を提示した。これにより、本書の記述が実態言語に基づくものではなく、歌学の場に限定される特殊な読曲であることを明らかにした。

《第Ⅲ部 事象の考察 —濁音・鼻音に関わる言語事象—》

【第5章 連声濁】

本章では、漢語に生じた「連声濁」の事象を扱った。これは撥音や漢字音の鼻音韻尾に由来して、後続の清音が濁音になる、音的な事象とされる。一方で、先行研究により和語に生じる連濁のような形態的条件が存在することが指摘されていた。ここでは連声濁にみられる形態的な側面が、なぜ生じたのかについて考察した。

この結果、形態的条件とされるものは、共時的に生産性をもった制約などではなく、歴史的に生じた語形変化の結果生じた分布であることを指摘した。具体的には、現象としての連声濁が生産性を失った後、全体として連声濁語形の構成要素に分析が働き、本来形（非連声濁形）へと回帰する傾向がある中で、当該の語形を構成する形態素が分析のしにくいものであった場合、連声濁語形を維持しやすいという条件を提示した。この場合、そもそもなぜ分析の結果回帰してしまう連声濁語形を生み出す、連声濁が生じたのかという点が疑問となる。これについては、先行研究でいわれるような濁音の性質の変化（超分節音から分節音へ）によって説明可能であるとした。すなわち濁音が超分節音的な要素であるならば、形態素の分析を直接妨げることはないが、分節音へと変化した後であれば、この点が問題になるとした。このような想定によって、濁音に生じた変化が日本語に与えた影響の一端を示した。

【第6章 漢語の「連濁」—「一山（サン）」を中心として—】

本章では、漢語の連濁について扱い、特に「一山（サン）」に注目した。この形態素の連濁は、現代語において、漢語との複合を中心として連濁する（火山（カザン）、眉山（ビザン））など、やや特殊な振る舞いをするものである。本章ではこれについて、次のような個別的な語形変化によって説明を加えた。

ここではまず、「一山（サン）」は中世末期において、撥音・長音に続く場合に限られていたが、当該時期から現代にかけて連濁形が増えたことを確認した。そしてその背景に、この形態素が「連濁した場合に同音衝突の可能性が少ないこと」と「固有名詞に使われやすいこと」を指摘し、連濁形の増加の積極的な理由として、従来連濁形が生じていた環境である撥音や長音を末部にもつ形態素が、口語において一拍の形態素と混同されやすかったとする推定を行った。これにより、現代語の異例的な連濁の振る舞いには、個別の語史が関わっている場合があることを示した。

【第7章 チ・ヂ、ツ・ヅの破擦音化】

本章では、チ・ヂ、ツ・ヅの破擦音化に関して、その経緯について考察した。これは清音と濁音共に生じた音韻変化である。ここではまず、この変化が音韻体系に与えた影響について考察を加え、サ行の摩擦音化をもたらしたとする。そして、音韻体系上の動きに注目し、従来結果的に生じた事象として考えられてきた、四つ仮名の合流の動きがこの変化の起点であったと考え、変化の全体像を提示した。そしてこれを、濁音が分節音としての機能を獲得したために生じうる変化として説明した。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (山 田 昇 平)			
	(職) 氏 名		
論文審査担当者	主 査	大阪大学 教授	岡島昭浩
	副 査	大阪大学 教授	金水 敏
	副 査	大阪大学 准教授	矢田 勉
論文審査の結果の要旨			
以下、本文別紙			

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： 中近世日本語の濁音・鼻音をめぐる研究

学位申請者 山田 昇平

論文審査担当者

主査 大阪大学教授 岡島昭浩

副査 大阪大学教授 金水 敏

副査 大阪大学准教授 矢田 勉

【論文内容の要旨】

本論文は、主に中近世の日本語における、濁音と鼻音に関わる諸問題を取り上げ、論じたものである。

「第Ⅰ部 歴史的術語の検討——濁音・鼻音をあらわしたことば——」では、濁音・鼻音に関わる術語として、第1章で”sonsonete”を、第2章で「言便」をとりあげている。「皮肉な言ひ方などに於ける鼻にかかるやうな抑揚のある発音」と説明されてきた”sonsonete”について、当時の資料を精査して、これが先行研究で指摘されるような「皮肉性」や「鼻音性」とは関わらないものであることを示し、連濁を説明する際に使われることのあった「言便」については、鎌倉時代の用例報告に始まり、江戸時代の賀茂真淵による使用までの転変を、「音便」という語との比較や、「言尾・言美」という派生語にも触れながら示している。

「第Ⅱ部 記述と解釈——資料上にあらわれた濁音・鼻音をどのように読み解くか——」では、第3章でドミニコ会のコリヤードによる『さんげろく』に付された鼻音符号と見られる”ゝ”について、「g, d, zz の前に多く、b の前には少なく、z の前にはほとんどあらわれない」という基本的な使用実態を具体的に明らかにしているが、これは、ローマ字分ち書きの問題や、長音符号との兼ね合いなどまで論じた上での呈示である。第4章、近世前期の資料『以敬斎聞書』に見える「ぢ・づ」を「つめて少し鼻へかけて濁る」についての論では、従来、これを中世末期頃の発音の実態を伝えるものと見てきたのに対し、近い時代の同じような文言を示し、またこの文献の性質をも考慮することで、これは、近世期以降の謡曲などで「ノム」「フクム」と言われる音（濁音・鼻音の前の促音に相当するもの）を示すものであり、これを「ぢ・づ」の発音に使うのは、仮名の読み分けの必要から生じた、人工的な知識音と考えるべきことを示した。

「第Ⅲ部 事象の考察——濁音・鼻音に関わる言語事象——」の第5章・第6章では連濁現象の変化について考察している。漢語の連濁は、連声濁と呼ばれる音声的な現象から、語構成を反映した（和語的な）連濁へと変化しているのであるが、その大概を探ったのが第5章で、第6章では、「～山」がサンからザンへと移る現象を、連濁の歴史の中に位置づけた。第7章ではチ・ヂ、ツ・ヅの破擦音化について考察している。

【論文審査の結果の要旨】

日本語音韻史を記述する上で大きな問題となる濁音とその周辺について取り組んだ力作であるが、題名が「めぐる研究」となっているように、濁音史の中心部に食い込んでいないように見受けられるのは残念である。しかし、本論文で考察されたことがらは、濁音史・濁音意識史・濁音研究史を記述する上で重要なことばかりである。

本論文のような音韻史の分野では、言語資料を分析することに加えて、各時代の人々が音韻について書き記した資料を探しだして、その時代背景を考察して、的確に解釈して行く、学史的な研究も必要となる。本論文でも、第Ⅰ部のような音韻に関する術語の研究と、第Ⅱ部第４章のような発音方法を記した資料の分析が学史的な研究であり、第Ⅱ部の他の章や第Ⅲ部が言語資料の分析であり、申請者がいずれをも扱うことができることを示している。例えば、第Ⅱ部第３章で、『さんげろく』におけるbの前の”ゝ”の分布が、baの前に偏するという事実と、ロドリゲス『日本大文典』における、bの前の鼻音についての記述を関連させて論じるところなどは、両者の交差する事例として貴重なものとなっている。第２章で、「言便」の歴史を追う際に、「言美・言尾」という言い方が切り出されることについて、「ゴンビンザワヤカニ」から「ゴンビザワヤカニ」へという濁音と撥音とに関わる問題があることを示したのも、単なる術語の歴史にとどまらぬ申請者の問題意識を示している。

ただ、本論文にも不十分と感じられる点が、最初に示した点以外にもある。第１章”sonsonete”の論や、第４章「つめて少し鼻へかけて濁る」の論は、従来、日本語音韻史の重要な記述と捉えられていたものについて、その再考を促すものであり、後ろ向きの論と捉えられかねないものである。第２章「言便」の論も、連濁に関わる術語ではあるが、濁音の性質について明らかになることがあるわけではないし、連濁をどのように把握してきたのかという問題意識で「言便」という言い方を位置づけることもなされていない。もちろん、こうした事象を積み重ねて行けば、濁音と鼻音との関係の歴史を探ることに繋がって行くのは理解できるのだが、そうした構想が、本論文の中に、十分に示されていないのが惜しまれる。第７章では、ザ行・ダ行の歴史について思い切った推論を述べているが、そのような推論は、その部分ではなく、全体の構想に関わる部分でなされるべきであったのではないと思われる。

このような問題点があるものの、本論文は、日本語音韻史において、濁音が鼻音とどう関わってきたかについて考えていく上で、大きな成果となっているし、日本漢語史の中においても、語形の歴史の面を、連濁のありようの変化と捉えた点で成果となっている。

よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。